

前」が側面と内部底に書かれていることは、はっきり特別な意味を持つものとして書かれたと考えるてよい。

「檜前」はもともと地名であり、そこに住んでいた人々、または「檜前女王」のように関連する人々を「檜前」の某と呼称したことは前にみてきたが、人間の呼称、名称だから墨書する位置が特別とは考えにくい。さきに引用した江原台遺跡では、人または集団(部)の呼称「丈」が10点ほど出土しているが、書かれている位置は、底部、側面ばらばらで特に統一性はない。しかし、統一性がないといってすべての人間呼称が書かれる場合、ばらばらとはいえない。この「檜前」2点は、009, 054址と出土遺構はちがいが、出土についてはそれぞれ独立性を持つが、書かれ方は統一されている。また、書体などから同一人の手によって書かれ、同時期の同じ意識のもとに書かれたもので、この場合人間の呼称でもあるが、「丈」のように多数の不特定の人たちを指すのではなく、特定の人間を指すものと考えた方がより合理的であろう。

では、特定な人物とはどんな人か、ということになるが、渡来系「檜前」ということと、奈良を中心に居をかまえている人たち、あるいは上海上の地方官などの系譜から、何らかの技術を持った人であったと考えられる。その技術とは何か、推

測の域は出ないが、「檜前人名表」の職業から推して、史生、経師といった文字に関係するものか、舎人や内裏の警備の記事などから軍事に関係するものかわからないが、新しい文化をもたらした人であることはまちがいないであろう。墨書が特別な書かれ方をされるのはそれなりの理由がなければならず、この意味でも「檜前」は、特別な人と解した方がよいと思われる。

墨書土器の研究はその出土量にくらべ研究はまだ未開拓といえる。土器型式からの分類研究もさることながら、墨書文字の意味、集落と墨書、文字の集落間交流、文字による集落の独立性の抽出等々、やらなければならないことは山積している。さきにあげた公津原の墨書位置分類だけみても、Loc 14, 15, 16では明らかになちがいをみせている。これらのことについては次回で考えてみたい。

(調査部長補佐)



縄文時代における「領域」「集落」小考

清 藤 一 順

はじめに

現代社会に生きる我々は、その複雑な構造故に、多種、多様な関係の上に存在している。これらの多岐にわたる関係は、同時に、多様で広範な活動空間を有するという結果を生じさせている。

我々にとっての活動の「場」は、日常寝起きする「すまい」、日々の労働を行う職場、食料衣料品等を購入する小売店、デパートなど、そして、それらを結びつけている交通網、この他にも、我々の目的により、多くの「場」が存在している。

これらは、日常寝起きする「すまい」を中心に、放射状、樹枝状に複雑な図式を描き、現代の人間が存在して行くために必要、不可欠な枝、葉、根としてある。

遡り縄文時代でも、現代ほど複雑多様化はしていないが、決して単純ではない関係、「場」が存在していたことが、様々な遺跡の、かたち、内容から見る事ができる。

多数の住居跡や、さまざまな遺構を多数伴う遺跡、これらの小規模な遺跡、落し穴状の土壇などのみが検出される遺跡、土器や石器などの遺物が出土し、人間が活動した痕跡は認められながらも、遺構が検出できない遺跡(ローム層を掘り込んだ遺構が存在しない)、丸木舟が出土した遺跡などのようにである。縄文時代でも、現代と同様、「すまい」を中心とした積極的な活動が行われたはずであり、これらが、異った遺跡の「かたち」「内容」として今日我々が見ることができるのである。こ

これらの内実と、関係を明らかにしてはじめて縄文時代が映し出されてくるのであり、たとえ、多数の遺構が検出される遺跡や貝塚を調査し、多く資料を得たとしても、縄文時代の一面を見たに過ぎないのである。

本稿では、これらの、縄文時代における人間達の集落と、生産活動の一部について、概略的に述べて見たい。

「領域」と「集落」

縄文時代に限らず、人間が、日常的、社会的生活を営むにあたって、必要不可欠な空間を生じさせる。

人間が雨露を避け、暖をとり、寝起きする為に住居を設け、それらが寄り集り住居群をなす。また、住居の内部、あるいは接した空間で、食料を加工、調理したり、衣類をつくろったり、日常的に使用する道具を作った。これらの極めて日常的で、生産活動を除いた、集落内で完結する活動の場が「居住領域」である。

この居住領域に接して、いくつかの場を、使用目的により限定している。この限定されている死者を埋葬する場が「墓域」であり、祭事を行う場が「祭域」である。この他、特に大規模な環状貝塚に見られるように、貝殻の遺棄されている場所が限定されており、この行為が他の集落との関係によりなされている場合、「加工域」として位置付けられる。

これらの、居住領域を中心とした、各領域が生活領域であり、集落の範囲として存在する。

この生活領域、集落を生活の基盤として、縄文人達は多目的に、広範囲にわたって活動を行った。狩猟、採集、漁撈により食料を、また、木材、粘土、石材などの道具、容器類の原材料や製品を獲得するために、時には、幾日もかけて行動した。これらの活動の範囲が、「生産領域」である。

生産領域については、考古学的に実証できる場合が少ない。この事は、これらの遺跡が、遺構、遺物などが多量に確認される場合が少く、調査の対象から除外されたり、また、単に遺物が出土した事、土坑が存在した事のみが簡略に報告される傾向にあるためである。少量でも遺物が出土し、土坑や焼土という、ある意味では軽易な遺構が検出されただけであったとしても、それ自体人間の

生活を表現している事実なのであり、そこには、棄てられ、置かれ、作られたりした理由が存在していたのである。これまで述べて来た事を整理すると以下のとおりである。

生活領域 (集落)	居住領域	住居跡群、屋外炉、小規模貝層、剥片集中地点など	}	露营地
		墓域		
	祭域	土偶、石棒などが特定の範囲に出土する場合 山梨県金生遺跡		
加工域	大規模貝層	}	}	露营地
	松戸市幸田貝塚 千葉市木戸作貝塚			
生産領域	食料獲得地	}	}	露营地
	佐倉市星谷津遺跡 東京都霧ヶ丘遺跡			
	原材料採集地			
	交換地(他の集落など)			

集落の定住と領域

先に述べた領域は、集落の定住化に応じて分化、規定されるようになる。

早期中葉までの住居も、今日では確認されている例は少なくない。しかし、集落の規模は、質量ともに貧弱である。茨城県相馬郡花輪台貝塚では5軒の竪穴住居が検出されているが、概してこの程度の集落である。また、住居の形状は不規則であり、また、炉、柱穴などの内部施設も設けられなかったり簡単なもので、掘り込みも浅い。また、集落に伴う住居以外の施設については特に設けられていない。これらは、ひんぱんな移動生活により、特定の場所には短期間しか集落を営まないために、整備され、しっかりとした住居などを作る必要がなかったのであろう。この時期の集落は、生産領域内に営まれ、集落自体がキャンプ地的内容を持ち、生産対象に応じた移動が繰り返されていたと考えられる。

早期、条痕文土器を伴う遺跡では、集落の定住化が開始された状態と見ることができる。それは、千葉県の、しかも、一地域に過ぎない国分谷周辺地域ではあるが、各遺跡が、支谷や台地という諸環境をとり込み、一定の間隔において立地していることから、生産対象に左右されることなく居を構えていた事が考えられる。また、千葉市向ノ台貝塚、佐倉市上座遺跡などのように住居の定型化ががり、さらに炉穴などの遺構数についても、千葉市鳥込東遺跡の約150基、市原市東間部多遺跡では約120基というように飛躍的に増加し、同一地点でのつくり替えが、定住の開始により、幾度となく行われている事が伺える。

前期になると、集落の定住化が確立し、このことから、集落においても、空間の、意識的な区別が行われるようになる。さきに述べた、早期条痕文土器の時期では、集落の定住化の開始に伴い、それまで、生産領域内に含まれていた集落が、生産領域を意識しながらも、別に考慮され設置され

ようになる。すなわち、生産領域を前提に、住みやすい所に集落を営むという、生産領域と生活領域の区別が認められるのである。

前期では、定住の完成、充実から、一層意識された空間、領域の設定が進行する。特に船橋市飯山満東遺跡、白井町復山谷遺跡などに認められるような前期中葉の墓域の発生により顕在化する。また、前期前半の夷隅郡新田野貝塚、松戸市幸田貝塚などのように、貝層を廃棄する場所が限定されていることは、貝の加工などを行う空間が意識されていたと考えられる。また、長野県原村阿久遺跡の方形配列土壇群も、分布が居住領域の内側の限られた地域に認められている。

中期には、集落内において、各領域が整然と配置される。一般的に言われる環状集落であるが、居住領域がドーナツ状に展開し、その外縁には環状貝塚に認められるように貝などの加工場が設けられる。さらに、内側には、松戸市子和清水貝塚(図1)船橋市高根木戸貝塚などのように小竪穴群の墓域



第1図 子和清水貝塚(報告書より転載)

が設けられたり、山梨県金生遺跡のように配石を伴う祭域が設けられている。

これらのように、集落の充実化を基盤として、さまざまな生産活動が展開されたのである。かつて、国分谷周辺の、前期から後期前半までの遺跡の分布を整理し、各群毎の生産領域の範囲を述べた。この事について、最近、西本氏より、「年間の生業活動が半径3km程度の範囲内でのみ行われたのであろうか、狭すぎるのではなからうか…」という御批判を受けた。(註1)。氏の言われる通りであり、私も、生産領域のすべてが、半径約3kmの範囲に含まれるのでは無いと考える。それは、内陸部の遺跡からも、小規模な貝層ではあるが検出されているのに顕著なとおり、必要に応じ、遠距離にまで出向いている事が伺えるからである。しかし、特に奥東京湾の地域では、基本的な生産領域としては、かつて述べたような領域が設定できると考えるのである。(図2)すなわち、日常的、基本的な生産領域としては、先に述べている区域が、他の集落との関係に規制され存在し、補足的、必要性により各集落の領域を超えて生産活動を行っていたと考えられるのである。

前期から後期に至るまで、奥東京湾地域には多数の集落遺跡が存在する。それは、奥東京湾が、特に漁撈にとつての絶好の場となった事によるのであろう。海に目を向けた多くの集落の存在は、生産活動の一部に不利益を生ずるという事態を生じたと考えられるがそれでも、この地域に集中したことは、より多くの利益が得られ、また、利益を得る為に集中せざるを得なかったのであろうか。この事をなさしめた背景には、印旛、手賀沼水系という、良好な環境のもとでの動、植物資源が存在する。この地域は、地形、水利等の絶好の環境に恵まれながら、手賀沼周辺などに若干の貝塚が存在するが、大集落は存在しない。東京湾岸の多くの、しかも大規模な集落群の飛躍的發展は、この地域を生産領域として保有する事で成し遂げられたのである。

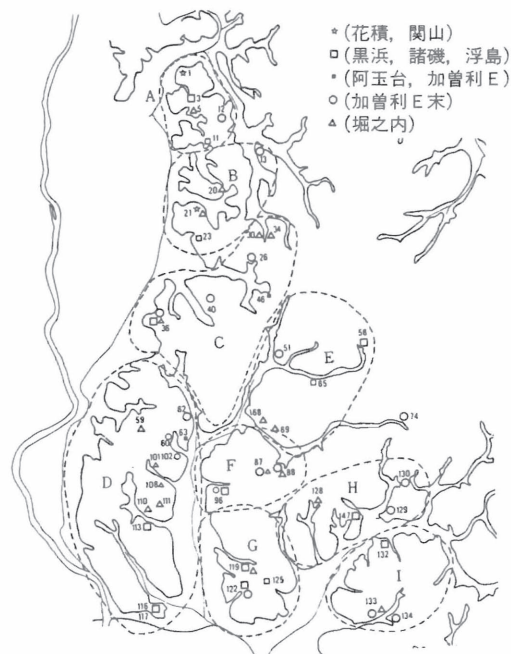
集落間における「分業」

貝塚にも、いくつかの種類が存在する。貝層の分布状態から、環状貝塚、点列貝塚、斜面貝塚などと呼ばれる。これは、表象的なちがいでではなく、その内実においても大きな相違を持って

る。これらの貝塚を形成する貝殻を見る時、明らかに集落内で食されたと考えられるものと、集落内で食したとするには、あまりにも多量過ぎる場合がある。前者の場合には点列貝塚として、後者の場合は環状貝塚として形成される事が多い。

我々は、先土器時代から、この地域に産出しない石材を使用した石器類が出土する事を知っている。これらは、さまざまな形の交易により手に入れたものであろう。手に入れるものがある時、送り出すものもあったはずである。環状貝塚を形成する莫大な量の貝殻は干貝などにして送り出した残殻なのであろう。

東京湾岸に存在する貝塚は多い。しかし、貝を加工し、送り出したような環状貝塚はその中の一部である。貝の加工を中心に行う集落が存在し、それが、地域に利益を持たず場合、この集落の行為を補償する集落が必要となる。生産をより効果的に行うために大規模な集落を形成する。そして、それを取り巻く他の集落、そして、他の群による補完の関係があつて初めて、環状貝塚は成立するのである。環状貝塚は、集落が自己完結的に存在したのでは無く、地域の中で果たした役割を最も明確に表現している遺跡であり、さらに、他の分野を担った集落の存在を裏付ける証拠でもある。



第2図 国分谷周辺の遺跡群

集落の構成と生産活動

集落の規模は、各遺跡により異っている。住居跡が多数検出される遺跡から、数軒の住居跡しか検出できない場合もある。これらの遺跡における住居跡の多少は、単に数量的な事では無く、集落を構成する集団の多少として理解できる。集落は、血縁による単位集団によって構成されている。

中期に見られる、典型的な環状集落を整理すると、船橋市高根木戸貝塚に見られるような1集団による集落と、松戸市子和清水貝塚、市原市草刈貝塚のように複数の集団により成立している集落の存在が伺える。先にも触れたとおり、集落の生産活動は単に一集落に帰結するのではなく、地域性を持ったものである。この事から、生産活動を軸に、集団の結合、集団の共同作業が行われ、これが大集落集落群として表われているのである。

おわりに

これまで述べて来たように、縄文時代人の生産活動は、きわめて充実した集落を基盤として、合理的に行われようとしていたと考えられる。特に、環状貝塚に見られるような特定の生産活動を行っ

ていた集団が存在しており、それは、地域的な「分業」の中で行われていたと考えられる。環状貝塚以外にも大規模な集落、小さな集落が数多く存在する。それらの集落も、それぞれの役割を担っていたはずである。これらを一つ一つ明らかにし、諸関係を整理する事から、縄文時代の姿の一部が映し出されて来るだろう。

註1 西本豊弘「狩猟、漁撈の場と遺跡」

季刊考古学 7号 1984

主要参考文献

堀越正行 「縄文時代の集落と共同組織」

駿台史学31号 1972

清藤一順 「縄文時代集落の成立と展開」

研究紀要2(財)千葉県文化財センター 1977

後藤和民 「縄文集落の概念」縄文文化の研究8, 社会・文化 1982

この他にも、多くの文献を使用したが、紙面の都合上、掲載できなかった事をお詫び致します。
(1班・班長)

No.6 遺跡(新東京国際空港内)の撚糸文期の資料

宮 重 行

1. はじめに

本遺跡は成田市新東京国際空港用地内に所在し、栗山川の支流高谷川により解析された支谷の最奥部に位置する。昭和52年に調査が行われた結果、先土器時代ユニット1、縄文時代の住居跡9軒、土坑13基、焼土遺構及び炉穴15基、陥穴状遺構31基等が検出された。出土の遺物は縄文時代早期の撚糸文系土器文化のものが主であり、なかでも稲荷台式(第Ⅳ様式)末期の沈線文を主文様とする土器が初めて確認されたこと、日本最古の土偶が出土したことで知られている。

この遺跡は既に昭和56年に報告されている(註1)が、事実記載中心の上、何分にも限られた部数しか発行できなかったため、その内容が今一つ正確に知られていないきらいがあった。そこで、今回幸いに文を書く機会に恵まれたので、関係者

の責務としてその概要(特に撚糸文期について)を改めて紹介し、私の見解を明らかにしておきたい。

2. 周辺の縄文早期遺跡

遺跡の周辺は太平洋に注ぐ栗山川と利根川に注ぐ根木名川の分水地点になっており、広く平坦な台地が多く、その縁辺には当遺跡対岸に夏島期のNo.7遺跡(註2)、北には鶴ヶ島台期の大遺跡であるNo.14遺跡(註3)、井草期のNo.60遺跡(註4)、三戸期のNo.67遺跡(註5)など、多くの縄文時代早期の遺跡が立地している。また少し南へ離れるが、同様の地理的環境の富里村には撚糸文期の金堀遺跡(註6)、両国沖Ⅲ遺跡(註7)等もあり、この地域はまさに縄文時代初頭の遺跡の宝庫といつてよい。